

(六)	き	す	険	熟	逆	紙	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)				
a	を	る	を	を	な	に	訂正されるだけの無人称の知として共有されるということ。 インターネットの知は、決して完結を見ることがなく、無限に加筆 い次元で完結させようとする美意識を生む力になってきたということ。 紙に刻まれた自己のつたなげへの呵責の念が、表現をより高 紙の白さを汚すことへの畏れが、表現行為の不可逆性を実感 させ、未成熟さを残すまいとする気構えを生むのだということ。 わずかな差異にも過敏なまでに執着するものだということ。 人間は作品を仕上げようとする際に悩み、選択する表現の	人間は作品を仕上げようとする際に悩み、選択する表現の わずかな差異にも過敏なまでに執着するものだということ。 紙の白さを汚すことへの畏れが、表現行為の不可逆性を実感 させ、未成熟さを残すまいとする気構えを生むのだということ。	わずかな差異にも過敏なまでに執着するものだということ。 紙の白さを汚すことへの畏れが、表現行為の不可逆性を実感 させ、未成熟さを残すまいとする気構えを生むのだということ。	わずかな差異にも過敏なまでに執着するものだということ。 紙の白さを汚すことへの畏れが、表現行為の不可逆性を実感 させ、未成熟さを残すまいとする気構えを生むのだということ。	わずかな差異にも過敏なまでに執着するものだということ。 紙の白さを汚すことへの畏れが、表現行為の不可逆性を実感 させ、未成熟さを残すまいとする気構えを生むのだということ。				
吟味	放	決	引	実	行	白						さ	紙	紙	紙
b	う	る	た	受	け	な						見	い	高	高
器量	に	覚	て	が	ら	と						感	う	高	高
c	の	悟	自	己	も	い						受	意	高	高
真偽	だ	ち	明	確	な	目						性	識	高	高
d	い	白	表	指	し	れ						に	が	高	高
回避	こ	が	現	を	な	失						よ	生	高	高
e	と	鮮	を	な	そ	う						り	ま	高	高
成就	。	や	な	そ	う	と						表	れ	高	高
就		か	な	そ	う	と						現	れ	高	高
		な	輝	と	危	未						と	れ	高	高
		輝	と	危	未	可	は	れ	高	高					
							不	れ	高	高					
							可	れ	高	高					

第三問

(一)	<p>毎日観察すること、何を描いた絵なのか判断しようとしたから。</p>
(二)	<p>風雅な松風は、趙抃の琴の音を暗示しているのではなからうか。</p>
(三)	<p>梅 長松 一亀</p>
(四)	<p>琴</p>
(五)	<p>趙抃の、役人として剛直な一方で、琴を樂しむ風雅を忘れなかつた心。</p>

第四問

(一)	(二)	(三)	(四)
<p>農家の構造には、かつて人々がそれぞれ役割に応じて自然と調和しながら生き生きと働いていた様子が窺えるということ。</p>	<p>一人で家に居ることによって、自分を見守る祖霊や生をととみにした人々と交感し、気持ちがかんになるということ。</p>	<p>近代化によって、代々の家で命を受け継ぐ自然とともにある生から離れ、都市の片隅で個人の孤独な生を終えたということ。</p>	<p>利便性へと向かう都市化への圧倒的な流れは、都会育ちの筆者の感傷を越えて、今や農村をものみ尽してしまっているから。</p>